

真鍋島のエビス信仰

田 中 宣 一

はじめに

エビス神は、わが国の代表的な民俗神の一つである。未開の異俗の人々というほどの意味のエビス¹⁾を名とするこの神の信仰は、少なくとも近世前期には、全国の漁業・農業・商業を営む多くの人々のあいだにさまざまな形で定着しており、現在でもなお、各地において熱心に信仰されている。その説明は、わが国の複雑な民間信仰の研究にとつてきわめて重要であり、現代社会理解のうえでも魅力的な課題である。

小稿は、エビス神の信仰すなわちエビス信仰の全国比較を意図しつつ、まずは一小地域におけるエビス信仰の様相

を、瀬戸内海のほぼ中央に位置する岡山県笠岡市の真鍋島の事例をもとに、うかがおうとするものである。

真鍋島がエビス信仰に格段の特色があるというわけでもない。いま信仰が特に盛んというわけでもない。むしろ衰退きみと言つてもよいが、同島を取りあげるのには、二つの理由がある。一つは個人的な理由で、もうだいたい時を経てしまつたが、昭和六十一年八月に成城大学の筆者のゼミの学生諸君と同島にお邪魔し、美しい自然に加え興味深い民俗と豊かな人情に心惹かれたからである。多くの方が長年にわたつて経験し伝えてこられたことを、熱心に話して下さつたにもかかわらず、私の指導力不足と諸般の事情により、申しわけないことに成果をまとめることができないまま今日にいたつている。いま不十分ながらエビス信仰について

だけでもまとめ、かつてのお世話のお礼としたい。もう一つは、かつて瀬戸内海歴史民俗資料館が瀬戸内海各地で海上信仰を調査して報告書を公表したが、同島はそのとき調査対象になっておらず、同島のエビス信仰を一つの事例としてそれに加えておくことも意味のあることと思つたからである。

いま栄えているエビス神関係の特定の神社・小祠を中心としたエビス信仰を分析するのも、研究上意義のあることであろう。また、福神としてのエビスとか、エビスと漂流水死体というように、さまざまな性格を持つエビス信仰の特定の側面に焦点を定めて広く各地の比較をするのも、意義のあることであろう。同時に、或るまとまった小地域におけるエビス神をすべて取りあげ、その人々がエビスをどのように認識していたのか、あるいは現在認識しているのかを明らかにすることも、エビス信仰研究上欠かせない作業である。小稿は、真鍋島という小地域において、ささやかながらそのことを試みようとするものである。

一、瀬戸内エビス信仰の概略

真鍋島のことを述べるまえに、瀬戸内海歴史民俗資料館編刊の『瀬戸内の海上信仰調査報告』（東部地域編と西部地域編）により、瀬戸内海地域のエビス信仰について概略みとおきたい。

同報告書は、瀬戸内地域の漁村部に広く見られるフナダマ（船霊）信仰、オオダマ信仰、龍神信仰、白旗信仰、金比羅信仰、住吉信仰、稻荷信仰、石鎚信仰、先山信仰、山の神信仰、弁天信仰、厳島信仰、鵜戸信仰、青島信仰、さらには海亀信仰、魔除けの貝をめぐる俗信等について述べている。そこでまず次のように要約している。

瀬戸内の漁民のあいだで、もつとも広く信仰されているのは、エビスサンである。およそ漁民のいる集落であれば、どんなに小さい部落でも、エビスサンの信仰がある。大きなものは、瓦ぶきの本格的な社から小さなものは、粗末な石のほくらまで、その形はさまざまである。エビスサンは大漁をもたらす神様として信じ

られている。ご神体は、ふつつ木製か石製の、鯛を小脇にかかえ、他の片手に釣竿を持ったエビスサンの像である。なかには、海底から拾いあげた自然石や、白さんごであるものもある。⁽³⁾

さらにそれらは、だいたい東部瀬戸内地域では兵庫県西宮市の西宮神社、西部瀬戸内地域では島根県美保関町の美保神社か広島県宮島町の厳島神社の、それぞれエビス信仰とつながりを持つものが多いという。

エビス神に大漁を祈願する点では同じでも、祀り方は各地微妙に異なっている。その中で比較的目につくのは、かつて鯛網の盛んであったころには、鯛網中央のオオダマと呼ばれる浮子または浮樽をエビス神と観念し、これを家の床の間などに据えて豊漁を祈ったことである。網おろしの際にも、神酒を注ぐなどしてこれを祀っていた。また、不漁が続く際には、エビスの神社や小祠の前でマンナオシをしたり、エビスの神像を漁場や沖合いに持ち出して豊漁を祈ったりしている。

エビスにまつわる伝承としては、他所のエビス像を盗んできて祀ると豊漁になると信じられ、しばしば盗んだり盗まれたりしていたという。その際、西の方角から盗んでく

ると効果があるとされていた。このほか、エビスは耳が不自由だとする伝承や、漂流水死体をエビスと考え、出漁中これに遭遇すると縁起がよいとして引き上げて戻り、丁寧に埋葬したともいわれている。

二、真鍋島概観

笠岡市は岡山県の最南部に位置し、真鍋島は笠岡市街から二〇キロメートルほど南方の、瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ島である。図のように細長く、周囲約七・五キロメートル、面積は約一・六平方キロメートルの規模である。島内には、本浦と岩坪の二集落がある。

筆者が初めて訪れた昭和六十一年八月当時の世帯数は本浦が一八〇、岩坪が一〇一で、人口は本浦が四〇六、岩坪が二七五であった。以前から続いていた過疎化がその後さらに静かに進み、現在の数はそれより少ない。特に人口減が著しい。

生業は、少なくとも近世以降は漁業と農業が中心であった。農業の場合、水田は皆無で、緩傾斜地を拓いた畑で主として麦・甘藷等を作り、自給食料としていた。しかし、

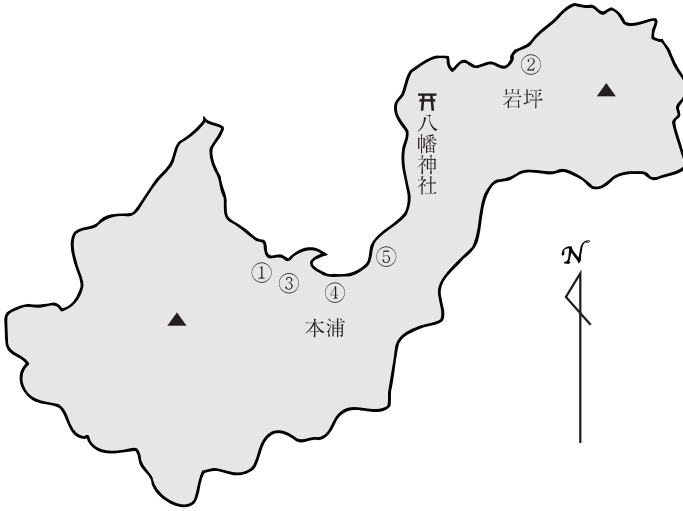


図 真鍋島略図

注： ~ は文中の ~ のエビス社の位置

昭和二十年代初頭より除虫菊の栽培が盛んとなり、つづいて切花用の花卉栽培に力を入れるようになったため、昭和二十〜四十年代は農業による収入が安定していたようである。だいたい昭和期末までその状態が続いたが、若年層の島外流出と農業従事者の高齢化によって、花卉栽培は衰退傾向となり、かつて美しい花の島といわれた真鍋島ではあるが、平成十三年に再訪島したときには、それらの畑のうち、灌木の藪となってしまったものも少なくなかった。

漁業は、真鍋島の主生業である。漁業従事者の高齢化の進んだ現在においても、主生業であることに変わりはない。昭和戦前期までは鯛網漁が盛んだったという。鯛網漁は親方船・網船など七〜一〇ハイ（艘）の船団で行ない、そのころはまだ櫓で漕いでいたので、一つの鯛網漁に五〇人前後が携わっていた。それらの人々を網元が雇用していたのである。網元も何軒があり、かつては網元を中心に、関係者によってエビス祭りやマナイタオコシ・オオダマオコシなど漁撈儀礼が盛大に行なわれていたという。また、鯛網や、昭和二十年代にはいかなご網が一〇〇統以上あったこともあるが、現在の網漁は家族中心で営まれ、さまざまな魚を対象とした底引網が主力である。一本釣漁や鯖重縄、

えび網なども行なわれている。

氏神は、両集落の中間に鎮座する八幡神社である。八幡神社の秋祭りには、神輿が本浦まで海上渡御をし、さらにお旅所まで走り込みをするいかにも漁村らしい威勢のよい行事が伝承されているが、青年層の減少で、現在はかつての勢いは薄れているという。八幡神社のほか、金比羅神社、山の神、州浜神社、荒神、天神、稲荷、住吉神社などの小祠が島内に祀られている。後述する戒神社やエビスの小祠も、それらの一つに属する。それら小祠ごとに独自の祭りが伝承されている。

特に漁村らしいものに、香川県の金比羅神社から元日早々に授けられる木の大きな神札（護摩札と呼んでいる）を、船でその日の午前中早いうちに島に持ち帰って、いったん氏神に参ったあと浜に戻るのであるが、それを皆が浜に出て迎え、神札で頭を叩いてもらうムラガイチョウという行事が伝えられている。櫓で漕いで往復していた頃には数日前に出発し、元日の朝でできるだけ早く島に戻ろうとして漕ぎ手の若い衆は必死だったという。このように競争するように早く漕いで戻ることがオシゴクという。なお、これに用いる船には新造船二艘があてられていた。

とにかく、かつて真鍋島には数多くの興味深い伝承があったし、現在でもまだまだ存在しているが、それらについてはすでに公刊されている『笠岡諸島の民俗』（岡山県教育委員会 昭和四十九年）その他をご覧いただくとして、以下小稿では、エビス信仰関係の伝承に絞って検討を試みたい。

三、真鍋島のエビス信仰

1、エビス各社と祭り

真鍋島には、祭りのときはもちろんのこと、祭り以外にも多くの方がおりおり参るエビスが、左のように五社存在している。

本浦の戒神社

岩坪の戒神社

玉姫大明神参道脇のエビス社

本浦の棧橋脇のエビス社

久一家裏のエビス社

このうち、のみ、簡易ながら拝殿を有する。しかし、を含めすべてが小祠と称すべきものばかりである。特に境内地らしきものもない。



写真1 本浦の戎神社（拝殿）

以下、
ついで順次述べて
いく。

本浦の戎神社
本浦の戎神社は
八浦のエビスとも
呼ばれている。そ
う呼ばれる理由は、
本浦の地域区分の
八区にあるからと
も、八区は別名生
土？（ハブ）と呼

き右手に釣竿を持っている。平成十三年現在、小祠の前には、高さ三〇センチほどの陶製のエビス・大黒像一対やプラスチック製の小さなエビス・大黒像一対が置かれている。これらは祀られているというよりも、どこかの家でもう祀られなくなつたエビス・大黒像を、ここへ納めたものである。同じ場所にいくつかの珊瑚も並べられている。漁師が海から拾いあげてここへ納めたものである。かつては網を揚げると、魚に混じってしばしば美しい珊瑚が入っていたものだとは、老漁師の言である。

現在の拝殿は昭和四十六年に改築されたもので、拝殿内に掲げられた改築に際しての寄附者名の板には、社司として坂本猪之助・山下亀吉・関東文吉の各氏、世話役として坪地友次・川東清・大島君正・関東清太・芳本光義の各氏、それに七八名の氏名が記載されている。当時、このエビスの世話をしていた人達や、これを信じていた人達であろう。なお、社司とは、戎神社に限らず、八幡神社の祭礼をはじめその年の真鍋島の神事の世話係をつとめる役である。

平成十三年に訪れたとき、拝殿内はやや雑然とし、個人的に参る人はいるようだが、全体的にエビスが熱心に祀られている感じはしなかった。近所の人に聞いてもここで祭

ばれるからだともいうが、人により説明は一定しない。

平成に入つて戎神社前の海岸が埋立てられたので、現在は海から隔てられているが、それまでは細い海岸道を挟んで直接海に面していた。約一間四方の拝殿を有し、拝殿内の正面奥の一段高くなつた場所に木の小祠が据えられ、その小祠内に、彩色された木像のエビスが祀られている。像高は約五四センチで、姿は烏帽子をかぶり、左手に鯛を抱

りが行なわれているのをしばらく見ていないというし、漁協付近で二人の漁師に尋ねても、しばらく祭りをした記憶がないという。では、しばらくとはどれくらいの期間かと聞いても答えは曖昧であったが、三〇年ほど前には拝殿を改築したくらいだから、当時はまだ熱心に祀る人が多くいたのであろう。

九日エビス・十日エビスという言葉を知っている人は多く、いろいろな話を総合すると、かつては一月十日と前夜（宵宮）に参る人が多かった。とくに宵宮にはエビスに



写真2 本浦の戎神社拝殿内の小祠とエビス像。前には珊瑚も納められている。

神酒と鏡餅（重ね餅という）を持って参る人が多く、網元などは、そのあと家で若い者に酒を飲ませていたという。これが戎神社の定期的な祭りだったのであろう。このほか臨時には、豊漁や不漁のときにも参りに行った。豊漁のときには網の仲間でお礼のために戎神社に参り、拝殿の前に旗を立て、皆で飲食を共にした。不漁のときにはマンナオシといって仲間ですべて共同祈願したが、この際には神主に来てもらい拜んでもらうことが多かったという。また、潮の小さい漁の合間とか、台風ぎみで海の荒れているときとか、身体に疲れがでて休養のほしいときなど、このような出漁をひかえるときにも年輩の人がエビス祭りをやるうかと提唱し、戎神社に集まって一パイやることがあった。網網時代には、網を入れる網代を決める相談も、戎神社に集まってしていたという。また、網を張る漁師と一本釣り漁師とが漁場をめぐる対立するようになるときに、ここに集まって相談をし、対立を調整していた。

岩坪の戎神社

岩坪の戎神社は、約二間半四方の拝殿を持ち、拝殿内の正面奥に木の小祠が据えられ、そのなかに高さ約三〇センチの石像エビスが祀られている。その姿は、左手に鯛を抱

き右手に釣竿を持つ坐像である。小祠の前には小さなさまざまなエビス像が置かれているが、これは祀られているというより、個人宅で祀らなくなった像をここへ納めたものようである。珊瑚も多く散在しており、漁師が網にかかった珊瑚をエビスに供えたのだという。ローソク立て・線香立てもあり、また、散米した人がいるらしく米粒が周囲にばらばら散らばっており、信仰が現に生きていることがわかる。

神社前には、「美保神社守護」と書かれた幟があり、この戎神社が島根県美保関町の美保神社系のエビスであることがわかる。小祠には美保神社の神札も納められている。

ここでは現在でも、一月十日（新暦）に十日エビスの祭りを行なっている。ただ、十日エビスとは称していても、賑やかなのは宵宮である九日夜である。戎神社の祭りに積極的に関わる家々をエビスのクミウチと呼び、平成十三年現在、クミウチは六軒ある。クミウチといっても特定の家筋の家というわけではない。クミウチはかつてはもつと多かったが、親の熱心な信仰を子が継承せずにクミウチを離れる家があったり、また希望して新たに加わる家があるなど、クミウチのメンバーは流動的である。金比羅のクミウ



写真3 岩坪の戎神社拝殿内のエビスの小祠。エビス像は少ししか見えない。近くには珊瑚が納められている。

チなどもあり、一軒でいくつもの神のクミウチに入っている場合もあるのである。

祭りのまえには、クミウチの人々が拝殿の掃除をしたり、幟を立てなおしたりという準備をする。供物には神酒、生魚（鯛とか鯉など何の魚でもよいが生のもの）、塩などが用意されるが、これはクミウチのなかから毎年交替で選ばれる当番が中心になって整える。宵宮に皆で飲み食いする馳走の準備も同じである。

さて、ヨミヤ（宵宮）にはクミウチ以外でも漁師を中心に集落の多くの人々が参りに来る。拜殿の前で火を焚き、クミウチの人々がそれら参拝者に酒や煮物などで接待するので、ヨミヤは賑やかである。そういう意味で、岩坪ではエビス信仰が現在十分に生きているといえよう。翌十日は十日エビス当日であるが、参拝者は多くなく、午前中に八幡神社の神官を招いて型どおりの式典をし、そのあと、クミウチの人々が卯酒に刺身という献立で飲み食いをして別れるだけである。十日は休漁日でもない。

十日エビスのほか、不漁が続いた場合には、クミウチとは関係なく、漁形態の業種ごとに戎神社へ参つてそのあと飲食を共にし、マンナオシをする。釣り漁をしている仲間同士とか、底引網の仲間、建網の仲間、鮪壺縄の仲間、海苔養殖の仲間など、さまざまな業種ごとに豊漁を共同祈願するのである。これらの業種は季節によって漁の盛期が異なるので、一人でいくつもの仲間に加わっている人もある。

玉姫大明神参道脇のエビス社

本浦の玉姫大明神へ参る坂道途中に祀られているエビス

で、高さ約四〇センチの木像である。左手に鯛を抱え、烏帽子をかぶったエビス像であるが、像の彫刻は素朴である。平成十三年現在、小祠は破損し、エビス社というにはあまりにも簡素である。熱心に信仰されているとはとても思えない。もともと特定の祭りはなかったようである。このエビスをツンボエビスと俗称する人が多く、耳の悪いエビスなので、小祠をバンバンと叩いたり来たことを大声で告げたりしてから参るべきだといわれている。また、オカエビスとも称され、かつては漁師以外の人でも多く参っていた。

棧橋前のエビス社

本浦の巡航船の棧橋脇の、小さいながらがっしりした木の小祠内に祀られている、高さ約五五センチの石像のエビス。像の姿は、左手に鯛を抱え右手に釣り竿を持ち、烏帽子をかぶっている。このエビスを中のエビスと呼ぶ人もいる。小祠内には、別に高さ約一〇センチの石像のエビスも納められている。もともと特定の祭りはなかったようである。

久一家裏のエビス社

本浦の東はずれの久一氏宅の裏に祀られている。そのた

めこれを東のエビスと呼ぶ人もある。石の小祠に納められた高さ約四〇センチの石像で、左手に鯛を抱え右手に釣竿を持つ姿である。頭部がやや損傷しているので定かではないが、かつては烏帽子姿だったのであろう。小祠の背面に「久屋久兵衛」と刻されているほか、台石裏に何か字が刻されているが、摩滅してよく読みとれない。

久一家四代目の人が祀り始めたのだと伝えられている。その頃、久一家は鯛網を経営していたので、鯛の豊漁を願って祀り始めたのだらうといわれている。したがって、かつては個人宅で祀るエビスで、久一家の屋内の床の間に祀られていたというが、いつの頃に小屋外に小祠を設けて祀るようになった。そうすると人目にもつくようになり、参る人もでてきたようである。ただ、特に祭りというようなものはない。

以上、からまで、筆者が確認しえたエビス社について述べてきた。このうち小さいながらも拜殿を持ち、十日エビスといつて一月十日に定期的に祭りを執行し、多くの参拝者を集めていたという点で、が本浦の、が岩坪の中心的なエビス社である。真鍋島には、八幡神社という由緒のある神社が、本浦・岩坪両集落共通の氏神として存在

しているため、両エビス社ついに氏神社に発展するにはいたらなかったが、漁民の多い真鍋島においては、両集落の重要な神としてかつては盛んに祀られていたのである。この両社は、いかなれば村エビスだと言つてもよいであろう。それに対して、のエビス社は、社というにはあまりにも簡素な祠しか持たず、かつて集落の大多数の人々のエビス信仰を結集していたとは思えない。明らかにのエビス社がそうであったように、も誰か個人（恐らく網元）の祀っていたエビスが、或る時期に複数の関係者間の信仰するところとなり、その信仰が薄れて、現在のかたちになったのではないかと思われる。真鍋島にはイッコウユウという言葉があり、それは信心のある特定の有力者が、独力で神社の石の鳥居とか社殿を建立したとか、小祠を改築したときなどに用いられるそうだが、のエビス社は、かつて個人によってイッコウユウで祀り始められたのであろう。

小さな真鍋島ではあるが、現在では祀り始めの時期や動機が不明になっているとはいえず、さまざまなエビスが祀られている、あるいは祀られていたことがわかった。筆者はかつて、鹿児島島の屋久島各集落のエビスを悉皆調査して報

告したことがあるが、その際にもほとんど例外なく、どの集落にも数社のエビスの存在することがわかった（なかには小祠とさえ言えない単なる自然石のものもあったが）。それらには多くの信仰を結集している村エビスと言ってもよいものもあつたが、飛魚を獲るためとか鯉の豊漁を祈つてとかいうように、特定の人々が個別目的で祀り始め、その後、祀り始めた人が離島したり飛魚漁や鯉漁が衰退しても何となく粗末には扱えずに、皆で祀りつづけているものもあつた。同じく海上信仰の神であつても、金比羅や住吉などにはこのような例はあまりなく、同じ地域で複数祀られつづけているのはエビス神の特徴といつてもよいであらう。

2、エビス社に参る機会

多くの漁民が十日エビスのとき　のエビス社に参つたことはすでに述べたが、本浦の漁民の場合には、同じ集落内にある　のエビス社にも、必ずというほどではないにしても、個別に簡単な供え物をしに行つたり、ちよつと手を合わせて拝むくらいのはしたようである。これは不漁のときにも同様だつたという。

正月二日朝の船のノリゾメ（乗り初め）のあとにも参る。

ノリゾメには、かつては船で港内を一周したというが、現在では繫留したまま、船内に祀る船靈に、イリワと呼ばれる白木の桶に入れて持参した白米（一升楯に入れてある）・鏡餅・小さい丸餅・小豆飯・尾頭つきの魚・神酒などを供えて礼拝し、船内各所（操縦室や生簀など）に神酒を注ぐ。龍神に献するのだと考えて海にも神酒を注ぐ。若い者を連れて行つたりしたときには、甲板で神酒を少し飲み合つともいう。そのあと、イリワに入れた供物をそっくり下げて下船するのであるが、そのあと、戎神社をはじめ金比羅の小祠など順々に参り、イリワに入れた供物を供え（供えたあとまたすぐに下げる）、神酒を注ぐのである。人によって多少異なるかもしれないが、筆者が昭和六十二年正月に岩坪の山本卯一郎氏に見せていただいたのは、以上のようであつた。ノリゾメはエビスに参るのが目的ではないが、必ず参るということだつた。なお本浦の人は、下船したあと、戎神社のほか本浦のエビス社すべてに参るのだという。

真鍋島では大晦日と節分の二回、屋内に豆撒きしたあと、集落内各所に豆撒きに歩く慣習があるが、このとき漁師は集落内のエビスには必ず参つて撒くという。この豆撒きは夕方提灯に火を点じ、一升楯に大豆を入れ、その上に鰯な

ど尾頭つきの小魚を載せて豆を撒いて歩くのであるが、このとき他の家の人と出会ってもいっさい言葉を交わしてはいけなさとされている。なおついでながら述べておくと、豆撒きに出ていく際には、通常の入り口ではなく縁側から出るのだという人もいる。エビスに参る機会を尋ねると、ほとんどの人がこの豆撒きのときのことを熱心に答えてくれるので、真鍋島の人々にとって、この二つは強く関係づけられていることかと思われる。このとき撒く豆をトシマメといい、トシマメの残りは必ず船に入れておけという。海上でボウレイ（船幽霊のこと）が出たときに投げつけるためだという。

3、家々のエビス

すべての家かどうかは確信を持ってないが、筆者の知るかぎりではどの家にもエビスの小さな木像が祀られている。長押の上に渡した大きな板（これが神棚である）に他の神々と同様に並べて祀られている。西宮神社や美保神社の神札と一緒に祀っている例もある。

4、エビスにまつわる伝承

筆者が判断するに、エビスはもっぱら漁の神だと人々に

理解されている。船や海上守護の神ではない。船内には船霊が祀られ、同時に金比羅神社や厳島神社、鞆の浦（広島県福山市）の沼名前神社などの神札が祀られているが、筆者の知るかぎりエビスは祀られていない。エビスは豊漁を願って海浜において祀られているのである。同じ漁民が生業神として祀る神々でも、機能は微妙に分かれているといえよう。

エビスはシモ（西の方をさす）から移動してくるといわれている。真鍋島ではエビス盗みの話は聞くことができなかったが、これは瀬戸内海各地で西の方から盗んでくるとよいという所があるのと、関係のある伝承であろう。エビスを不具神とする考えは一般的ではなかったが、かすかながらのエビス社に耳の不自由な神だという伝承があるのは興味深い。なお、漂流水死体をエビスだとする伝承は聞くことができなかった。

5、エビス関連の行事

鯛網が絶えてから久しいので、昭和六十一年当時でも、鯛網など中心的役割を荷なつて鯛網漁をしたことのある人はもう健在ではなかった。若い衆として働いた人はいいたの

で、それらの方にエビスのことを尋ねていると、話はしばしばオオダマオコシのことと混線してしまい、エビスの祭りの話なのかオオダマオコシのことなのか、筆者はもとより話者自身も判然としないことがあった。何度が聞き返しても、同じであった。主宰者の網元などは別として、多くの若い漁民にとっては、エビス祭りとおオダマオコシは、結局はどちらであつてもたいしたことのない、豊漁を求める関係深い行事として認識されていたからである。そこで、筆者が理解したかぎりのオオダマオコシについて述べておきたい。オオダマとは、鯛網の浮子の中心をなす烏帽子の形をした大きめの浮子のこと、オオダマアバとも呼ばれ、桐の木で作られていた。網元家では、古い網からオオダマアバをとりはずして、他の神札やエビス像などと一緒に神棚に祀っていた。それを十日エビスのときに、戎神社に参るのは別に、家のエビスと一緒に屋内で特別に祀つたようである。このとき、今年船に乗ってくれる人を招いて馳走などし、賑やかに祝つたようである。また、春に鯛網を始めるにあたって、浜でウタセアミをしてオオダマをつける際にも、神棚のオオダマに供え物をして祀つてたよつである。

おわりに

真鍋島のエビス信仰について述べてきたが、集落ごとに村エビスとでも称すべき中心となるエビス社があり、そのほかさらに数社存在することが確認できた。いずれも由緒は定かでないが、村エビス以外のエビス社のなかには、かつて有力な網元家などが祀つていたのが、鯛網漁の衰退とともにその家の信仰を離れ、不特定の人々の不断の信仰にわずかに支えられ存続しているものもあることも推測できた。かつては一つの地域にさまざまなエビスが熱心に祀られていたことが、わかつたのである。

しかし漁の形態が、鯛網漁など多人数で行なう漁から、機械力を生かした家内労力中心の漁に移行するようになり、エビスへの共同祈願の機会が減り、エビス信仰は全般的に衰退しつつあるように思われる。本浦集落においては、特にその感が強い。ただ、まだ岩坪では十日エビスの祭りが生きており、本浦においても鯛網漁の経験者が少数ながら健在で、いくつかの貴重な話をうかがえたのは幸いであつた。

小稿ではエビス信仰についてしか述べることができなかつたが、真鍋島の漁信仰は多彩であり、いつかそれらをまとめてみたい。

(小稿をなすにあたり、荒山忠氏、井本栄太郎氏、井本満寿夫氏、久一滝夫氏、城山鉄二郎氏、的場石蔵氏、的場勲氏、真鍋礼三氏、峯口貞造氏、山下孟氏、山本卯一郎氏、芳本光義氏をはじめ、多くの方々にお世話になった。記して感謝申しあげます。)

註

- 1 エビスの表記は、恵比須・恵比寿・夷・戎・蛭子・胡などさまざまあるが、小稿では固有名詞を除いて「エビス」で統一したい。
- 2 この報告書は、『瀬戸内の海上信仰調査報告』で、瀬戸内海歴史民俗資料館から「東部地域」編が昭和五十四年三月に、「西部地域」編が昭和五十五年三月に編集発行されている。
- 3 前掲註2の「東部地域」編 一三〇ページ。
- 4 拙稿「屋久島のエビス神信仰」『日本常民文化紀要』第八輯 昭和五十七年三月。